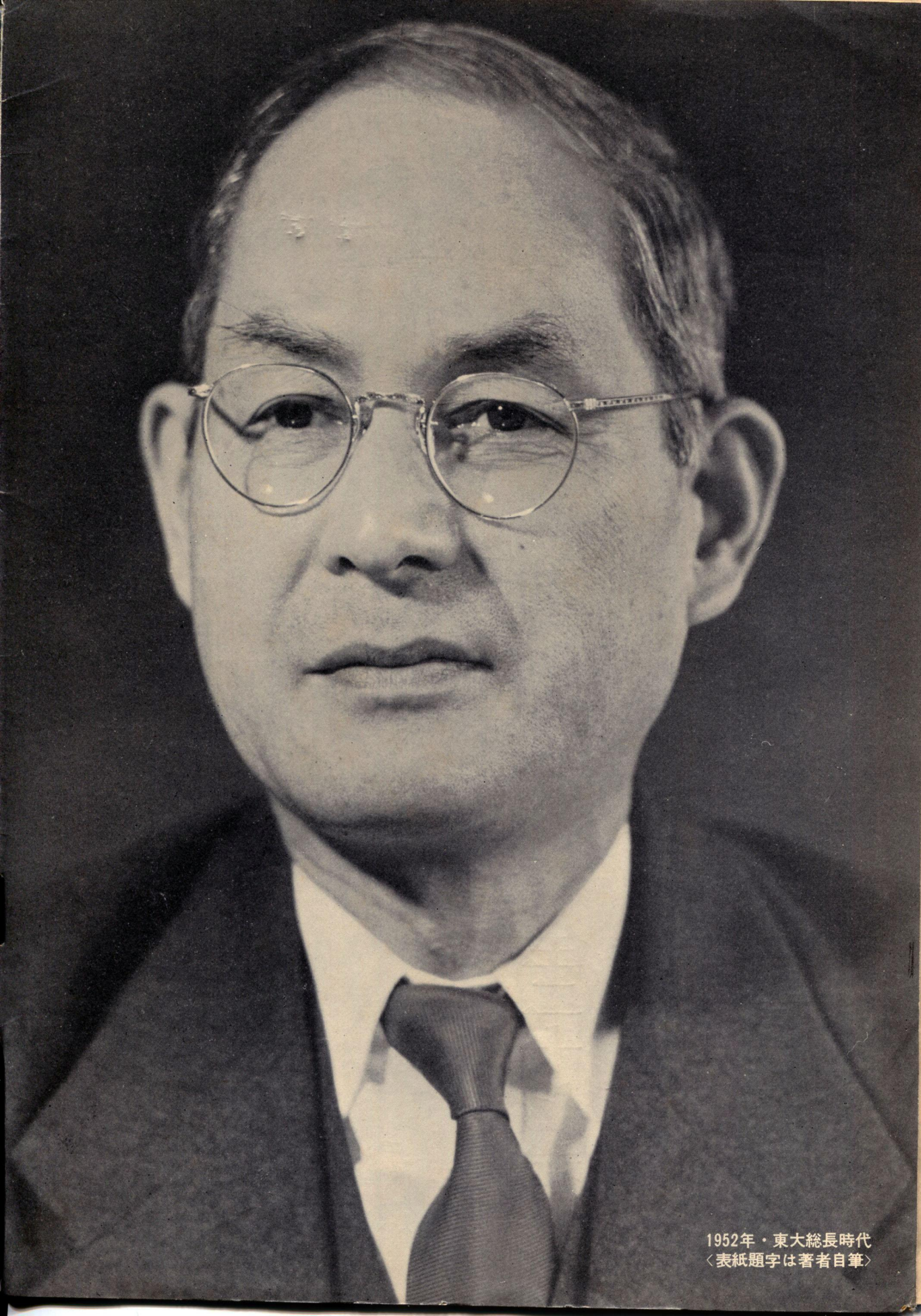


監修者 南原 繁 大内兵衛 黒崎幸吉 楊井克己 大塚久雄  
編集者 楊井克己 大塚久雄 藤田若雄 坂井基始良 矢内原伊作

夫内兵衛忠雄全集

全二十七卷

岩波書店刊行



1952年・東大総長時代  
〈表紙題字は著者自筆〉

## 刊行にあたって

矢内原忠雄先生は、一方では、『帝國主義下の台湾』その他の名著を遺した得がたい経済学者として知られ、他方では、現代における最も純粋にして不屈の基督者として敬愛され、さらに、戦後の混乱期に民主主義の大義を明らかにした卓越せる教育者としても、広く世の尊敬を集めておられました。まことに、経済学者として、基督者として、また教育者として、先生の一代の奮闘は、それぞれの分野にそれぞれに貴重な遺産として、多くの業績を遺されました。しかし、先生六十余年の生涯をもって完成され、余人には恐らく絶対に期待しがたい独自の作品として生み出された最大のものは、正に、優れた社会科学家と、純乎たる基督者と、偉大な教育者とを一身に兼ねた、先生の人格そのもの、その美しき生涯、そのたぐい少なき統一ではないでしょうか。

本全集は、かかる先生の全貌を伝えることを眼目として、先生の活動の全域にわたり、生前公けにされた著書はもとより、『嘉信』その他に発表された短言や書簡の類までも蒐集し、これを學術・信仰・教育等の活動部門にしたがって整理し、一貫して先生の精神をたどれるように編纂したものであって、先生の眞実の姿は、ここにはじめて残りなく示されるであります。かつてわが国民が無道な軍国主義の下に支配され、学問・言論の自由はもろん、信仰の自由すら奪われた時代に、あらゆる強圧に屈せず、学者として、基督者として、その操守を貫かれた先生の精神に対し、ふたたび新たな評価の起りつつある今日、この全集を世に送ることは、小社の大いなる喜びであります。

一九六三年二月

岩波書店

## 信 仰 と 学 問

前東京大学総長

南 原 繁

昭和二十六年十二月某日、東大中央大講堂内の評議会室で、総長選挙の投票が開票され、その結果、教養学部長矢内原忠雄君が多数をもって戦後二代目の総長に当選した。その瞬間、拍手とともに一同の眼は同君の上に注がれた。白晳の顔を少しく紅潮させた彼は、受諾の挨拶をするかと思いのほか、沈んだ声で暫く考えさせて貰いたいと言った。私は選挙管理者の立場上、もし出来たら別室で懇談してはどうかと勧めて見たが、即答が得られそうもなかったので、選挙協議会はそのまま閉じた。

その翌日、下落合の茅屋を庭の落葉を踏んで、彼は飄然訪ねて来た。いうまでもなく、きのうの結果についての相談であった。矢内原君が私に訊きたかったのは、総長に就任することによって、その宗教活動は妨げられはしないだろうかということであった。彼は終戦とともに大学に復帰して後も、大学を罷めてからの八年間と同じように、宗教的個人雑誌『嘉信』の発行はもとより、毎日曜の集會を持っていた。大学構内では学生の信仰団体である「聖書研究会」の指導もしていた。そのほか、時に地方の伝道旅行にも出かけた。彼はこれらの活動が出来ないようであれば、当選を辞退するつもりであったらしい。国立大学では、ことに戦後、宗教と教育とは厳格に分離されたが、個人としての宗教的信仰や活動は一層自由であり、そのことは教授の場合そうであるように、総長になっても相違はない筈である。ただ、総長は相当の激職であるから健康に留意する必要があるであろうと言って、私は就任を促した。

以来、六年間、名総長として、多忙な中に、学内外の幾多の困難な問題の解決に当たったと同時に、他方、その宗教活動はいささかも変ることなく続けられた。矢内原君にとっては、キリスト教の信仰がその思想と行動の源泉であり、すべては神の栄光のためであった。それ故に、彼の信仰について知ることなくして、その学問も教育観も理解しえないであろう。彼は既にその専門とする植民政策について不朽の業績を残したが、それ以上に、終始、伝道者として多くの聖書講義と信仰の証詞をなした。また教育者として、しばしば人生と社会を論じ、預言者的警世の文も書いた。否、ただ書き、あるいは語ったのみでなく、それを死に至るまで実行して悔いがないでた。

全集二十七巻はその波乱に富んだ生涯と超人的活動の記録というべく、戦前と戦争の時代を通して、その孤独苦難の日にも、終戦後の平和と栄光の日にも、つねに神を信じ、真理のために勞し闘った彼の个性的人格が脈うっている。いま、彼を敬慕する後進の人たちの熱心と協力によって、この全集の編纂されたことを悦び、青年学徒諸君をはじめ、広く江湖に推薦する所以である。

### 独自の位置を占める思想家

教育大学文学部教授

家 永 三 郎

最近数十年の日本の思想史をふり返るときに、この数十年の比較的短い期間が、思想家にとってきわめてきびしい試煉の時代であったこと、ほんものの思想とまがいものの思想とのえりわけがこの時代くらいははっきりと行なわれた例はあまりないことに気づくのである

口 神 イエスの生涯  
創刊の辭

◇ イエス傳講話(一)  
最初の奇蹟

◇ 神の國の預言に就て

◇ 自由と統制

矢内原忠雄

個人雜誌『嘉信』創刊号表紙

う。思想家としての矢内原忠雄は、このきびしい試煉の時代の中で、ほんものの思想のもち主であることをりっぱに証明した、数多くない思想家の一人であろうと思われる。

内村鑑三の感化によって培われたのではないかと考えられる強烈な正義への志向と、マルクス経済学から学びとられたらしい厳密な科学的真理追求の精神——その歴史的系譜だけについて皮相に観察すれば、全く相容れないようにも見えるこの両者が、彼においてはみごとに統一せられ、信仰と科学、理論と実践、思想と生活とが完全な一体化を示した。そして、いっそう重要なことは、その統一が終生少しくずれることなく維持された、という事実である。

日本の「帝国主義」全盛の時代にあつて、彼が日本の「帝国主義」のメカニズムに容赦のない科学的分析のメスをふるうことのできたのも、侵略戦争を弾劾し、大学を追放され、論壇からしめ出されても、少しもひるまず、個人雑誌に拠つて正義の声を叫びつづけ、あの強大な軍国主義権力に最後まで屈伏しなかったのも、戦後のめまぐるしい情勢の変化の中で、死にいたるまで平和と民主主義の擁護の立場を貫いてきたのも、決して偶然ではない。

経済学者としての矢内原忠雄、無教会キリスト者としての矢内原忠雄、大学総長としての矢内原忠雄、そうしたさまざまな側面を超えて、日本近代思想史の上に独自の位置を占める思想家矢内原忠雄を知るために、その思想活動の全貌を開示したこの全集の刊行を、日本の思想に深い関心をいだく一人として、心から歓迎したいと思う。たとえ世代と立場との相違による違和感を免れないとしても、戦前世代の最もすぐれた思想的遺産のうちには、現代の歴史の最尖端に生きる人々にとって、検討され継承され発展されねばならぬものが豊富にふくまれているのではなからうか。

## 思想を生きた人

京都大学人文科学研究所所長

桑原武夫

信念の人、思想を生きた人、というような言葉を私たちは気軽に使いすぎている。そうした人が私たちの社会に容易に見出しうるかのように。習いおぼえた一つの考え方に固執するのみで、その発展をはかることなく、ために世をすね公的活動を停止した頑固者を、思想を生きた人とはいえないのである。

自己の思想をつねに現実の中で鍛えつつ、しかも「現実主義」の安易に決して墮することなく、いわば思想自体がその人に持たれることによって成長したような人、矢内原忠雄は現代日本において思想を生きた稀有の人である。

無信仰で、先生の説のすべてには同調していない私のような者でも、この理想主義

者が地上のいかなる権力にも屈することなく、地道に同志を組織しつつ、一方、東大総長というような権力との交渉のはげしい職務をあえて回避せずして、自己の思想を生きぬいた点には深く打たれる。

平和問題談話会の精神的柱石としての先生の静かでもしかも気魄にみちた発言と、わずか三日間であったが一九五九年の講演旅行中に示された人間的温かみを想起しつつ、この全集によって真の理想主義者の生き方をつかみたいと思う。

## 矢内原先生と聖書講義

東京大学教養学部教授

前田護郎

矢内原先生の著作は植民政策など学術的なもの、聖書の研究と信仰に関するもの、大学論などを含む評論、世相批判や自伝などの三つに大別することが出来る。年若くして内村鑑三先生の下で聖書を学んでキリスト教の信仰に入り、真理愛に燃えて研究と教育に専念し、迫害を受けつつも日本国を熱愛して発言を止めなかった先生であるがゆえに、学究、聖書研究、評論の三つの間には互いに離れ切れぬ関係がある。しかし、聖書と信仰に関するものはこのすべての根底をなすものであり、量的にも最も大きく、このたび企画された全集二十七巻のうち聖書講義だけでも八巻を占めている。年代的に見ても、社会科学の新進学徒としての頃から始まり、或いは満洲事変で表面化した軍国主義と対決しつつ、或いは東大を去られてから太平洋戦争の最中において苦難を重ねつつ、また、戦後東大へ復帰されてから劇務のかたわら、という激しい環境の中でつづけられ、退官後死の床に至るまで絶えなかった。この事実が示すように聖書講義は先生の全生涯に通ずるものであった。その内容は日曜ごとの集まりや夏休みの講習会、或いは全国にわたる伝道の機会などになされた聖書講義のノートがもとになっている。従って文体は極めて平明であって論文調でなく、親しく話しかけるような筆致である。社会科学者としての矢内原先生は外遊中イギリスの円満な学風を体得し、ドイツの鋭い科学的分析や実証の世界に触れておられるが、こうした諸国の長所が先生の文筆活動のすべてに反映している。また先生の講義がいわゆる雄弁ではなく、特に激しいことばがあっても全体として地味であったように、書かれるものも多くの人が理解し得るようにとの謙虚な心遣いがにじみ出ている。学生の質問や人事相談などに忍耐深く応じておられた先生は、それをそのまま聖書講義の発表形式にも示しておられるように思う。先生は専門の宗教学家ではなくて一介の平信徒であり、市民としての信仰生活をつづけながら、多くの人々と同じ平面で苦楽を共にしようとした。職業化した宗教や形式化した神学のお嫌いであった先生は、みずから聖書の本文に親しんでそこに信仰生活の基本を見るところ、鑑三先生の教えに忠実に従い、聖書に示される真の幸福すなわち罪のゆるしの福音を一聖書読者として同胞に伝えることを願いつつ筆を進められたのである。昭和十一年に出た聖書講義『イザヤ書』の序文に、「之等（聖書本文）の研究によりて啓発されたる聖書の姿をば西欧の学者の手から日本の平民の手に移したいといふのが私の念願である。聖書をば日本国民の書としたい、日本国民の愛読書とした

い。何となれば聖書の真理こそ個人を救ひ、国民を救ひ、世界を救ふ根本の力であると私は信ずるからである」といっておられる。専門家でなく、一聖書読者として謙遜と熱意をもって書かれた手紙として親しむならば、矢内原先生の聖書講義はその真価を發揮し、読者は救いのありかを示されるであろう。

### 矢内原君とマルクス主義

東京大学名誉教授

大内兵衛

矢内原君は完全に宗教的であつたが、ぼくは無宗教である。矢内原君とぼくは学生や若い友人を共通にしたので、彼らは信仰のちがつた二人がなぜあんなに仲がよいのかを問題として、たびたびその理由をぼくに聞いた。事実、大学でも社会においても、宗教的仕事のほかは、一生を通じてたいのことは共同にやり、そのため進退を共にさえたのであるが、その間にいちどもけんかをしたことがなかった。不思議といえば不思議かもしれない。

矢内原君とぼくとは学問の上で、とくに植民政策論や帝国主義論ではずいぶん多量の議論をやっている。そのために費された時間とコーヒー代（われわれはいかなるときでもワリカンであつた）は相当の量にのぼつたが、ぼくにとつては、一生を通じてのゼイタクであつた。この会話にはいつも二つの筋糸がからみ合つていた。一つはキリスト教的ヒューマニズム、他はマルクスの唯物主義。そしてこの二つの筋糸はいつも二人の手にかたくにぎられていた。話がからんだり、並行したり、しかし何となくほぐれたりしたのは当然であつた。

昭和七年に矢内原君は『マルクス主義と基督教』という本を出している。あれが、ぼくとの会話の結果できたものであるといつては僭越であるが、彼は「君との会話によつて啓発された」といい、ぼくの批評を求めたのは事実である。そこでぼくは調子にのつて数十枚にわたる長編の批評を書いて矢内原君に呈した。それはそれでよかつたのであるが、この批判の下書きを書きとめておいたぼくのノートが、昭和十三年の検挙のときに警察に押えられた事はまずかつた。というのは、検事局に対するぼくの弁解は科学としてのマルクスは正しいとするが、ぼくはマルクス主義の実践運動をしていないといふのであつた。それに対して、検事局はお前はそういうけれどもお前自身矢内原教授のキリスト教を批判して、あれでは革命はできないといつてゐるじゃないか。お前の矢内原にあつた手紙にお前自身そう書いてゐるじゃないかといふのであつた。この話をたびたび思い出すが、これにはどこか辻つまの合わぬ点がある。検事の論理も必ずしも無理とは

いえない。一生を通じて、実行家として、とくに改革的な意味での実行において、ぼくはいつも矢内原君の後塵を拝していた。そのことを彼もぼくもよく知っていた。その彼にぼくが革命を口にして立ち向かっていたとすれば、いよいよおかし。ぼくのてれかくしてあったか。ぼくの弱さを以って矢内原君の強さに向かっていた。

一般にクリスト教には無関心であるにかかわらず、ぼくは矢内原君のクリスト教だけには興味をもっている。矢内原君の全集が出たら、この部分も、必ず読むつもりである。いままらクリスチャンになるためではない。それは、ぼく自身の化石化しつつある人間の情感のスタミナ剤であるからである。

## 信仰と社会科学と

東京大学経済学部教授

大塚久雄

現世のことがらに究極の価値をおくようなことを、矢内原先生はされなかった。これは先生の生き方をつねに特徴づけていたことだと言つてよい。しかし、そうかといつて、いや私はむしろそれだからと言いたいのであるが、先生は現世のことから、とくに社会的な現実を決してないがしろにはされなかった。それどころか、われわれが現にそのなかで生きている現実の世界が、先生にとって、そこでわれわれが神の栄光を増し加えねばならぬ、かけがえのない場所であったことは、昭和十二年に先生が東大を去られるにいたったあの時、当局が問題にした論文や著書が他ならぬ「国家の理想」であり、「満洲問題」であったことにもよく示されていると思う。

もちろん先生のばあい、信仰は何よりもまず個人の魂の奥底における問題であった。十字架の信仰であった。が、社会的な現実とのそうしたかかわりあい、先生の信仰に預言的な逞ましさと関連な健やかさを賦与したことは否みがたい。

『私の歩んできた道』のある個所で、「平和についても、やはり信仰と学問、その両方からでした。その両方が私には矛盾しない一つのものになっていた。……よく譬えに、一本の縄は弱いけれども、より合わせた縄は強い、と言われている。私にも信仰と科学がより合わされて、私の力となっている」とみずから語っておられる。先生の社会科学上の諸著作が厳密な学問的観点からする評価において価値の高いものであることは、私が述べるまでもないと思うが、そうした学問的業績と良心的な社会的発言の背後には、「強き神の子、不朽の愛」への純一な仰望と信頼が、つねに支えとなつて蔽存していた。いや、むしろ先生においては、社会科学の研究は信仰生活の一部分とさえなつていたといつても、けつして過言ではないであらう。

このたび岩波書店から刊行される『矢内原忠雄全集』全二十七巻では、社会科学上の諸研究、聖書講義、時論等すべてが一体として編集されているが、以上のような意味で、これは矢内原忠雄先生が現世において走りつくされた道程とその意味を知るうえに、もっとも相応わしい形ではなからうか。先生の精神が生きた姿で一人でも多くの人に伝えられることを祈る。



# 矢内原先生に学ぶもの

国際キリスト教大学教授

武田清子

永い御病床の故に、かねて心にそなえてはいたが、矢内原忠雄先生が召されたことは大きな衝撃を私に与えた。秋に病室へ菊の花をもってお見舞にうかがったあと、二ヵ月ばかりインドに行っていた。そして、十二月も終る頃、帰国と共に飛行場で夫から先ずきかされたことは先生の死であった。しかし、それは単なる死のしらせではなかった。私は静かに、じっくりと時間をかけて見きわめなくてはならない巨大なあるもの、一つの大きな問題にぶつかってしまったような気がした。それは、表現しにくいのであるが、誤解を恐れずに言うならば、身のひきしまるような決意をもって、何かをその巨大な存在の生命からうけついで生きぬかねばならないというような、覚悟を迫り来るものでもあった。そして、そういう感じがその時以来ずっと私の中に位置を占めて生きつづけているのである。私はこの一人の先人の死にそういうものを感じることに不思議でならない。

私は日本基督教団の教会に属するものであって、無教会のメンバーではない。先生のお話は幾度もうかがったし、個人的接触も割合あって、親しく御指導いただいたことは事実である。私がひとりぼっちで窮地に立つかも知れない——というような時、それを私が気づく前に先生が心配してささえていて下さったというようにもあった。しかし、私は先生の今井館の集会に出席したこともなく（しばしばそれを希い一つも遂に出席しなかった）、いわゆる矢内原先生の弟子ではなかったのである。それにもかかわらず、先生がイエスに従って生きぬかれた生とその死は、私のような小さな、そして割合距離をもった一人の人間にさえも、このような衝撃を与えるのである。私は今その意味を問いつづけている。

矢内原先生は、イエスにひたすら従う信仰の人であると共に、人間社会の悪や矛盾の現実の中に、神にあっての正義と平和が勝利を占めることを求めて誠実に生きぬこうとするキリスト者であった。そのために、日本人に特有な苦しみを苦しみぬいた預言者であった。そして、孤独と悲しみの人であった。

私はこの矢内原先生を全体として今一度はつきりとつかみ直したい。そして、本当のキリスト者、本当の日本人であることの意味を学び直したいと希うこと切である。

このたび、先生の学問上の著作から、聖書講義、時論、教育論をはじめとして、『嘉信』の短言、詩歌や書簡までも含む全集が出版されることは、実に有難い。「無教会の指導者」などという狭いワケに先生を閉じこめることなく、すべてのキリスト者、すべての日本人が、この偉大な人間像に出逢い直し、著作の全体から彼の生命をうけつづきたいものである。

## 国家の理想

さかば郵便

2nd 2-5  
9-17  
11-19

### I. 理想と現実

理想の基礎 集積、現実の光輝が理想にある。  
現実の基礎、現実の支持たる精神が礎である。  
理想は科学の分析、批判によりは解けず、  
直観、体験による。—— 預言者。

### II. 理想の思ふ時

理想の思ふ時。現実の光輝がある。理想  
批判——指導——現実の救済。永遠の基礎の  
完成。抱擁。

### III. 国家の理想

人の本質——存在の根源、自己と他者の関係  
維持——宗教的存在（理想の理想）  
Hitlerの Anti-Semitismism の批判的考察  
人の本質は「神聖の愛」の愛の心（聖書の）  
神聖の愛は「神聖の愛」の愛の心。  
人は社会的動物。——社会正義。他人の幸福  
を愛するは神聖の愛の心。他人の幸福を愛する  
は神聖の愛の心。他人の幸福を愛するは神聖の愛  
の心。他人の幸福を愛するは神聖の愛の心。

### IV. 国家の理想

国家の本質は何か。  
国家の理想は何か。  
国家の理想は何か。

論文「国家の理想」メモ

## 矢内原君と私

「永遠の生命」誌主幹

黒崎幸吉

矢内原君は、一高、東大では私より六年の後輩であり、郷里も東北と四国なので、普通ならば知り合う機会がなかったのであるが、丁度我々の中間に君の先輩川西実三君や三谷隆正君たちの一グループがあり、その一団を中間に挿んで相知るに至ったのであった。これらの一団は柏会と称して一高校長新渡戸博士に愛され、また柏木の内村鑑三先生のもとに弟子入りをした連中であつた。

ところが私は大学卒業後、住友に入社し、大正五年に別子銅山の新居浜の経理課に勤務しておつた。丁度その翌年、君は大学を卒業し住友に入り、新夫人と共に新居浜に赴任してこれ私をビックリさせたのであつた。「どうして天下の秀才がこんな田舎を希望したのか」ときいたところ、「郷里が近い為」と言つておられたのであるが、恐らく——これは私一個の推測であるが——少しく脱線して高校（旧制）を中退された兄上を救う為であつたと私は思う。君は別子鉱業所長久保氏に懇請して兄上を新居浜の住友肥料製造所（住友化学）に就職させ、同時に久保氏の書生にして貰ひ、かくして兄上の全生涯を一転せしめられたのであつた。君のこの愛と真実と熱心とによつて兄上を救われたと言つても決して過言ではないと私は信じている。

この君の細かく優しい愛情と配慮とは、その弟子や友人の一人一人とその家族にまでも及んでおつた。私の多くの子供の一人一人の名を記憶し、深い愛と関心とを持っておられたことは驚くほどであつた。この深い愛情は君のすべての友人と弟子たちにも及んだことと思う。

しかしただ単に優しいだけではなく、同時に君の愛を裏切る者に対する激しい怒りと不興は、多くの友人や弟子を恐れしめたのであるが、これは君の愛の当然の頭われであつた。要するに君の優しさと恐ろしさとは君の性格を特徴づける著しい点であつた。

その後二年ほどで君は東大に招聘され、ただちに欧米に留学されたのであるが、それまでの間、私の宅や君の所などで聖書研究のグループが毎週集まって語り合い聖書を学んだ事は忘れえない記憶である。その中から少なからぬ無教會的信仰が生まれ、君の死に至るまで親しい友情を続けておれたことも特筆すべきことである。今井館の聖書研究会もその継続と言へると思う。

## 父のこと

大阪大学文学部助教授

矢内原伊作

父はその生涯の最後の四ヶ月足らずを、東大伝染病研究所附属病院の一室でおくつた。明るい病室で、花がいつも窓辺にあふれていたが、容態は日ごとに悪化するばかりで、堪えがたく苦しい日々だった。「生涯での最大の敵」と自ら呼んだその病気が不治の病である

ことを父は知っていただろうか。誰もそれを告げなかったが、なにごとについても明敏な父のことだから、おそらく病気の性質を知っていただろうと私は想像する。だがそのことについては父も何一つ口にしなかった。肉体の苦痛に加えて、そこにどんな精神の苦しい戦いがあったか。日々やせほそり、激痛にさいなまれる病床で、父はわがままを言わなくなり、周囲の者に優しくなり、痛苦をとまなう医師の治療に従順にしたがい、早く解放されて天に召されることを願いながら、「みこころならばなお生きのびて、福音のために更に働こう」という神への信頼を最後までもちつづけた。不治の病の床にあってこのように祈ることは不思議だと人は言うだろうか。このような祈りがきかれなかったことの方がよほど不思議なことには思われる。

その病室の壁には、父が自分で書いた書が幾つか懸けられていた。聖句を書いたもののほかに、「真実」と書かれたものがあり、「単純」と書かれたものがあった。父はおよそ趣味といったものには縁の遠い人で、そういったものに心を向けるには、六十八年の生涯はあまりにも「真実単純」に貫かれていたわけだが、だから書道といったものにもおそろく無縁だった。その書は素人の字で、いわゆる能筆というものではないだろうが、つまり真実単純な書体なのである。父が地上にのこした仕事は、学者、教育者、福音伝道者、預言者の時代批判者、と幅がひろく、その書いたものの量も、この全集が示す通り極めて多いが、これらすべてを貫いて根柢に流れているのは真実単純に徹した人格だと言えるかと思う。それは一方では学問への深い愛となり、他方では信仰によって一層深められ、時局に對する鋭い批判や正確な判断を生むと同時に、植民地の被圧迫者や逆境にある病者たちへの尽きることのない愛の源となった。

父の全集刊行についてはいろいろのプランがあった。学問教育関係のもので選集を出すという企画もあり、信仰関係のものをまとめて編集するという案もあった。しかし、学問教育の面での業績と信仰の面での活動とがまさに一つの中心から発しているところにその生涯の意味があったという観点から、生前に父が書いて発表した一切の文章を収録するという、理想的な形で全集が刊行されることになったのはたいへん嬉しく有難いことである。父は多くの仕事をしたが、『藤井武全集』を二度にわたってみずから編集刊行したこともその重要な仕事の一つであった。最初に刊行されたのは昭和六年だが、その第一巻の扉に父は私のために次のように書いてくれた。「本全集ハ父ガ心血ヲ澱イデ編輯刊行シタルモノナリ 之ヲ汝ニ与フ能ク讀ミテ眞實ナル基督者タランコトヲ期スベシ」と。父はすべてのことに心血を願っている。

本全集ハ父ガ心血ヲ澱

イデ編輯刊行シタルモノナリ

之ヲ汝ニ與フ能ク讀ミテ眞

實ナル基督者タランコトヲ

期スベシ 一九三二年三月

伊作殿

## ■全二十七巻の内容

『 』内の書名は単行本として刊行されたもの

第一巻 植民政策研究Ⅰ 『植民及植民政策』 『植民政策の新基調』

第二巻 植民政策研究Ⅱ 『人口問題』 『帝国主義下の台湾』 『満洲問題』

第三巻 植民政策研究Ⅲ 『南洋群島の研究』 『帝国主義下の印度』

第四巻 植民政策研究Ⅳ 『帝国主義研究』 植民地再分割問題・南洋委任統治論・植民地政策に於ける文化・大陸と民族・植民地国民運動と英帝国の将来・ほか経済関係論文二十八篇

第五巻 植民政策研究Ⅴ 『国際経済論』・アダムスミスの戦争論・経済学の貧困・インフレーション論と統制経済論・日本経済の復興について・ほか経済関係論文・書評・学界展望四十二篇

最初の五巻は、経済学者としての著者の学問的労作を、その専攻とする植民政策研究の名のもとに一括した。生前出版の単行本はその体裁のまま発行順に従って収録し、単行本未収の雑誌論文は、これを項目別に編集して収めた。著者のすべての学問的業績の背後には、常に、病めるもの、貧しきもの、沈めるもの、に対する激しい救いの情熱が沈潜して秘められている。

第六巻 聖書講義Ⅰ 『イエス伝』 『山上垂訓講義』・マタイ伝随想・使徒行伝講義

第七巻 聖書講義Ⅱ 『ルカ伝』・ルカ伝補遺

第八巻 聖書講義Ⅲ 『ロマ書』・コリント前後書・ガラテヤ書・エペソ書・ピリピ書・

ピレモン書・ヘブル書・ヨハネ第一書

## ■私たちの期待

主編 金子鈴子

私が始めて『嘉信』を読み始めたのは、一九四二年一月、先生満五十歳の時であった。太平洋戦争の激しかったその頃の『嘉信』には、毎号烈々たる預言と、聖書の真理を説く言と、弱き者への慰めの言とが満ちていた。病床にあった私は、これらの一冊一冊を喰いつくようにして読み、戦争に対する正しい批判の目を養われると共に、キリスト教の信仰をもって生きようという自分の生涯の精神的目標をしっかりと見究めたのであった。

終戦の年の春から夏にかけて療養所にいた私は、空襲警報が鳴るたびに聖書と『嘉信』をカバンに詰め、それを持って防空壕に入りました。その頃の療友を始めとして、戦後も幾人もの不幸な人々を慰め、信仰へ導くために、私の『嘉信』は幾度も貸し出され、返されて、今では無惨にも茶色のしみがつき、すりぎれそうになってしまったが、この傷ついた『嘉信』は、大切に本箱の奥にしまい込まれ続けた『嘉信』に比べ、何と多くの人々に慰めを伝え、信仰の灯をともしてくれたことか！殊に終戦直前、『嘉信』が会報となつてから用紙不足のため、ワラ半紙一枚の両面

第九卷 聖書講義 IV 『ヨハネ伝』 『黙示録』

第十卷 聖書講義 V 『創世記』 『ヨシヤア記』・士師記・ルツ記・『サムエル書』・エリア伝

第十一卷 聖書講義 VI 『詩篇』・箴言・雅歌

第十二卷 聖書講義 VII 『第一イザヤ書』・注解イザヤ書・第二イザヤ書・第三イザヤ書

第十三卷 聖書講義 VIII 『ヨブ記』・注解ヨブ記・エレミヤ記・ホセア書・オバデヤ書・アモス書・ゼカリヤ書

著者は生前、日曜集会において行なつた聖書講義を整理し、個人雑誌『嘉信』に発表、さらに逐次これを単行本として刊行し、「イエス伝」から「ヨブ記」に至る十二冊を發表した。本全集はこれをそのままの形で収録するとともに、すでに『嘉信』に掲載された聖書講義で、単行本としては刊行されなかつたものすべてを編集し、併せて第六卷以下の八卷に収めた。排列は新約旧約聖書の順序に従い、聖書を学ぶものの好伴侶たらしめることを期した。

なお、著者の信仰に関するエッセイ、時局批判の評論はきわめて多い。とくに著者は戦後、旺盛な評論活動を展開した。これらはその都度逐次、折にふれてまとめられ、単行本として刊行されていったが、必ずしも主題により統一のある著書としての形をとらなかつた。本全集は、第十七卷以下の十巻においてこれらの評論・随想のすべてを再編集し、「基督者の信仰」「短言」「時論」「教育論」「人生論」「評伝」「自伝」等のテーマ別に分けて集録した。

#### 第十四卷 基督者の信仰 I

『基督者の信仰』 『キリスト教入門』 『キリストの生涯』・信仰と理性・人生と宗教・如何にして基督教を学ぶか・罪の意識について・教会について・奇蹟について・対神語・信仰録・復活論・サタン論・神癒論・異言論・再臨信仰の歴史性・ほか四十三篇

に一分の隙もなく小さな字でぎっしり書かれたその一枚一枚の何と尊いことであらう。

それらの『嘉信』の言が、先生の学問的な諸論文と共に今再び活字に生まれ、装いも新たに『矢内原忠雄全集』となって世に出ようとしている。前に読むことの出来なかつた人も、既に一度読んだ人も、共に心を新たに先生の心を注がれた言を学ぶ機会を与えられることは本当に大きな感謝である。

先生は聖書講義の時にも、一般の講演の時にも、重箱の隅を箸でつつくように神学的な問題をほじくることをなさらず、いつも問題の根本を捕えて、聖書の真理を私たちの心にたたきこもうとなさつた。また古代イスラエルの歴史を扱つた旧約の記事の中に、歴史の流れを越えて貫かれてくる神の支配をよみとり、それを原則として現代の社会の動きに対する洞察の目をやしなつて下さつたように思う。

今度新たに全集が出るのを機会に、無名の主婦、会社員、教師、学生、農夫、商人、その他あらゆる階層の人々が、先生の教えられた聖書の正しい読み方をしっかりと身につけ、キリストの信仰に基づいて「時世の動き」を正しく見通し、かつ批判する力を養われるならば、たとえそれがいかに少数で無力でも、神が日本の国の将来を守り給うために必要な「遺れる者」として、その存在価値を神の前に認められるのではないか、またそうならねばならぬと祈るのである。この全集が日本全国津々浦々にまで運ばれて、一人でも多くの人に読まれ、更にその人の子や孫にまで読み

第十五卷 基督者の信仰Ⅱ

日本とキリスト教・宗教改革論・基督教理想主義・無教会主義とは何か・宣教百年と無教会運動・日本の基督者平民に告ぐ・現代の宗教改革とは何か・神の国の予言について・予言と福音・予言者概論・洗礼者ヨハネ論・ほか十七篇

第十六卷 基督者の信仰Ⅲ

『マルクス主義と基督教』『歴史と人間』・現代の危機とキリスト教・現代社会とキリスト教・基督教と共産党・キリスト教からみた民主主義と共産主義についての覚え書・ヒューマニズムとニヒリズム・原子力時代の宗教・戦後世界の精神的危機・ほか十八篇  
著者はもとより職業的な宗教家ではなく、聖書学者でもなく、純粋に信仰の人であった。この見地から、著者の信仰に関する文章を一括して、「基督者の信仰」三巻に収めた。キリスト教をわかりやすく説いた入門的文章、信仰の純粋を守る為の護教論、さらにマルクス主義等との対決を通して論ずる現代文明の批判、などから成る。

第十七卷 短言

言 「通信」短言・「嘉信」短言・「独立」短言・「東京独立新聞」短言

著者は師内村鑑三の志を継ぎ、終生、無教会主義を通した。したがって、著者の発行する雑誌「通信」「嘉信」などの誌上に毎月発表された短文が、神とのみ交わる孤独の信仰者としての著者の人となり、生き生きと伝える場所となった。それは、ある時は厳しい審判のことばとなり、ある時は読む人をして新生せしめる慰めの力であった。第十七巻はこれら珠玉の短文六五四篇を発表順に従ってまとめた。

第十八卷 時論

論 I 『民族と平和』『民族と国家』『現代日本小史(総説)』『戦後日本小史(総説)』・近代日本における宗教と民主主義・国家の理想・神の国・ほか六篇

第十九卷 時論

論 II 『日本の傷を医す者』『日本精神と平和国家』『講和問題と平和問題』『聖書に現れたる国際平和の思想』・平和国家への道・日本国民の使命と反省・日本の復興と女性・聖書からみた日本の将

継がれて、日本の良心となり、神の国の礎となるように祈ってやまない。

作家 山口 矩子

敬愛申し上げる矢内原先生が地上での御用を果たされて神様の許に召されてからもう一年経ってしまいました。今回、多くの祈りのうちに先生の全集が刊行される運びとなりまして私はその日を指折り数えて待っておりませぬ者の一人でございます。先生の心血を注がれた全著作が今やあますところなく世人の前に光芒を放つ壮観さを想像いたしました、胸を熱くしているのでございます。私は全集によって、改めて、地の塩世の光であられた先生のお言葉を学び、自分の血とし肉としたいと切望いたしております。先生が直接間接に愚かな私を導かれましたことは実に大きなものでございました。私は先生によって聖書を教えられ、信仰を学び、人間の生きる道、国を興す道に知ったのでございます。先生のお眼差しは鋭く厳しくありましたが、その底に氷をも溶かす温かい涙が湛えられてありました。即ち先生はサタンに対しては勇士の如く、傷める葦に対しては「婦に優る愛」(サムエル後書一の一〇)を抱かれたのであります。先生は神様に対してはひたむきで、いつもきっぱりとしていられ、ぐずぐずしたこ

## 第二十卷 時

### 論 III

来・ほか十八篇

日本のゆくへ・自由と独立・民族独立の精神・国民の安全を保障するもの・民主政治を蝕むもの・民族の価値と平和の価値・緊張の緩和・マッカーシズム・日本民主化の将来・原子力時代の平和・原水爆禁止の要求・内村鑑三とフルシチョフ・平和の理想・民族主義と愛国心・ほか六十八篇

時論は、年代順に排列して、日本の政治社会の様相の変化と著者との対決を明かにする。信仰によって現実から逃避することなく、かえって雄々しく現実に立ちむかい、常に正義を主張し、自由と平和とを愛し、民衆の幸福を説いて倦まなかつた著者の面目と思想とは、戦前戦後を通じてその一貫した時勢批判に凝集されている。

## 第二三卷 教育論・大学論

平和と教育・学問と教育の自由・政治と教育・教育の危機・道徳教育・権力と教育・科学と教育・民主主義と教育・教育者の自由と責任・日本の将来と教育・人間形成について・教育の目ざす人間像・ほか二十六篇

『大学について』・学問的精神と大学の使命・大学の自治と学生の自治・大学の理念と社会・ほか二十五篇

第二十一巻は、学者として後進を指導し、また東大総長、教養学部長として広く青年の育成に勉めた著者の、学生に与えることばや講演などを一括して収める。併せて、教育二法案に反対した著者の教育思想、大学行政についての考えかたも、ここに明らかにされている。

## 第二三卷

### 人生論・

#### 『告白』講義

幸福への道・愛と結婚・サラリーマンと信仰・人間観と女性観・聖書の婦人観・青年に与う・人間と人生・世界の将来と青年の任務・子供のために・学生に与う・学生および学生運動・学者と政治家・学者の愛国心・医療と伝導・ほか七十六篇

とがお嫌いで、約束は必ず守られ、素直で、人を引っぱっていく力をお持ちでした。先生の前に、偽りのない自分の姿そのまま膝を正すのが何と楽しいことでありましたことか。先生にさとされて、泣き笑いしつつキリストによる希望と歓喜を新たにすることが幾度ありましたことか。先生の最大関心事は勿論、個人および社会の救いでしたが、自然に対しても濃まやかな愛を持たれました。先生が私に与えられたお歌に、「空の鳥を見よ野の百合花を見よとのたまひし君の御声の山にこたます」というのがありますが、自然の中に現われている天国の姿を感じられて、お口から洩れるお言葉は珠玉のごとく美しくありました。私が殊に懐しく思い出すのは自然の中で寛ろいであられるお姿であります。三年前の秋の山中湖畔聖書集會の際、大出山に上った折、銀色に光る薄の穂波の中に立ちつくしていられた先生の前に、富士山が荘厳極まる全貌を現わしていました。その時、先生は、富士山の素晴らしさと北斎の富士山について、心に喰い入る空の深い色とセザンヌの色彩について、ブレイクの聖書画について等々、語られました。嵐で折れた樹木を保護してあるのに目を留められて、自然と人間の協力だねと呟やかれたのです。ロマ書八章には自然は人間界の救われるのを待つて呻いているとありますがその呻きを身をもって感じになつていたと思われてなりません。

『アウグステイヌス「告白」講義』

愛の人でもあった著者には、また豊かな人生を語る文章がいくつかある。第二十二巻は、これらを『アウグステイヌス「告白」講義』と併せて一巻とした。

第三三巻 満洲・朝鮮・

沖繩・

クリスチー『奉天三十年』（翻訳）・クリスチーの跡・或る朝鮮人女学生との会話・異邦伝道・南洋群島の伝道・伝道精神・ほか七篇

現地に見る沖繩の諸問題・世界沖繩琉球大学・沖繩旅行・ほか十篇

本全集は著者の著作のみを集め、翻訳は一切これを収録しないことを原則とした。しかしクリスチー著『奉天三十年』は、戦中、大学を逐われた著者の信念と行動とに不離の關係にある内容を持ち、また日本の植民地の民衆に対する著者の心情がこまやかにこめられている訳業であるので、とくにこれを収録することとし、戦前の日本植民地と伝道についての評論、および戦後の沖繩における講演と併せて、ここに一巻を編んだ。

第三四巻 余の尊敬する人物

『余の尊敬する人物』『続余の尊敬する人物』・内村鑑三論・内村鑑三と現代・内村鑑三と私・内村鑑三と新渡戸稲造・新渡戸博士の宗教・新渡戸先生の学問と講義・藤井武君小伝・藤井武を思う・ほか四十篇

第三五巻 交友・追憶

大内兵衛君を語る・石井満君と私・「永遠の生命」誌と私・ほか交友録四篇。

江原万里・畔上賢造・三谷隆正・川西瑞夫・宮部金吾・藤井洋・金沢常雄・ほか追憶記六十五篇・序跋文・雑報

『余の尊敬する人物』は、内村鑑三の『代表的日本人』にも比すべき独特の人物評伝であるが、これに併せて、著者の人間形成に最も影響を与えた二人の恩師・内村鑑三、新渡戸稲造、および信仰上の先輩・藤井武の三人に関する評伝をまとめて一巻となした。

■この全集の特色

■キリスト者、経済学者、教育者——一身にこの三者を兼ねそなえた先生の全貌が、一目で窺えるように編集されている。また、各巻に、編集者の執筆になる編集後記を付した。

■著者は生前、個人雑誌『嘉信』を毎月発行し聖書講義、信仰に関するエッセイ、時局批判の評論、短文など、その多くはこれに掲載発表してきた。本全集は、これらを内容によって、項目ごとに編集し、関連の論文を併せ読みうるよう、読者の便をはかった。研究者の為には、別に『嘉信』総目次を作成、これを年譜と共に最終巻に付した。

■著者が著作として発表したものは、そのすべてを収録した。講演速記等であっても著者の校訂を経っていないもの、たとえば講演速記などは、一切これを収めていない。

■なお、すべての著作は、著者の最終決定稿に拠った。

■体裁／四六判クローズ装製函入／本文特麗上質紙使用／平均七〇〇頁／各巻口絵一葉／  
定価各八〇〇円



別に、学者としての同僚、信仰の友、著者の親しき友人の交友録、追憶記を集めて一巻を編成した。

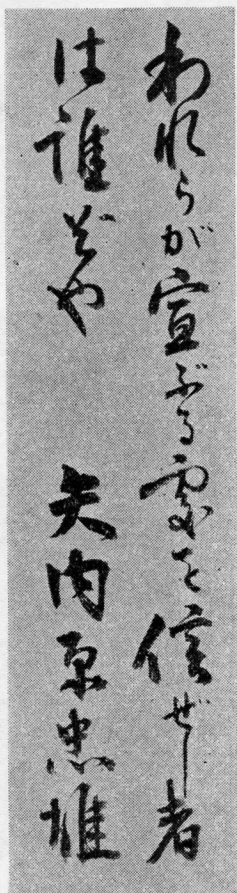
### 第三六卷 私の歩んできた道

『私の歩んできた道』・私の人生遍歴・私の伝道生涯・私は如何にして基督信徒となったか・匪賊に遭った話・「通信」の廃刊と「嘉信」の創刊・東大総長の六年・私の歌・母・妹の死・ほか四十六篇  
詩歌・集会関係の文章（東大聖書研究会記・聖書講習会記・および「葡萄」誌、「橄欖」誌、「山鳩」誌掲載記事）

著者は、生前、「私の歩んできた道」「私の人生遍歴」「私の伝道生涯」などいくつもの自伝的文章を発表しているが、これらを一括し、著者の自画像を構成することにつとめた。また著者が中学、一高時代に発表した少年期・青年期の文章若干を収録し、後年、大樹をなした著者の資質をも明らかにした。

### 第三七卷 書簡・年譜 書簡・年譜・「嘉信」目次・ほか

著者のあらゆる活動の生きた鼓動を伝える書簡を出来る限り広汎に集め、著者の各時代における多面的な姿を髣髴たらしめようと心掛けた。また詳細な年譜を作成し、著者の活動・著作と時代背景の関連を明瞭ならしめることを期した。



■お願い／矢内原忠雄先生の書簡御所持のかたは、なにとぞ左記までお送りいただきたく存じます。

矢内原恵子氏宛

（東京都目黒区自由ヶ丘二九二）

\*

\*

## ■ 予約申込規定

### ■ 頒布方法

全二十七巻。予約申込者のみお申し込み。分冊申込みのお求めには応じかねます。

### ■ 申込期限

昭和三十八年四月三十日（火曜日）

### ■ 刊行期日

昭和三十八年三月十一日に第一回配本。第二回配本は四月十一日。以後毎月一巻ずつ刊行し、昭和四十年五月に全巻を完結する予定であります。

### ■ 申込方法

申込期限までに、最寄りの書店へお申込みください。（お取りつけの書店がない場合には直接発行所へお申込みください。ただし、一巻につき送料一二〇円を申し受けません。）

# 矢内原忠雄先生略年譜

- 明治二十六年(一八九三)  
 1月27日/愛媛県越智郡富田村大字松木の医家の次男として生まれる。  
 明治四十四年(一九一〇) 18歳  
 10月/第一高等学校二年、内村鑑三の聖書研究会に入門。  
 大正六年(一九一七) 24歳  
 3月/東京帝国大学卒。 4月/住友入社。  
 大正九年(一九二〇) 27歳  
 3月/東京帝国大学助教授。10月 植民政策研究のため英・独・仏・米へ留学。  
 大正十年(一九二一) 28歳  
 7月/『基督者の信仰』  
 大正十二年(一九二三) 30歳  
 2月/帰朝。 8月/東京帝国大学教授  
 大正十四年(一九二五) 32歳  
 6月/帝大聖書研究会を始める。  
 大正十五年(一九二六) 33歳  
 6月/『植民及植民政策』  
 昭和二年(一九二七) 34歳  
 2月/『植民政策の新基調』  
 昭和三年(一九二八) 35歳  
 2月/『人口問題』  
 昭和四年(一九二九) 36歳  
 10月/『帝國主義下の台湾』  
 昭和七年(一九三二) 39歳  
 3月/『マルクス主義と基督教』  
 8月/滿洲旅行中、匪賊のため列車遭難。  
 11月/雑誌『通信』創刊。  
 昭和九年(一九三四) 41歳  
 2月/『滿洲問題』  
 昭和十年(一九三五) 42歳  
 4月/『ヨブ記』 10月/『南洋群島の研究』  
 昭和十一年(一九三六) 43歳  
 6月/『民族と平和』 12月/『イザヤ書』  
 昭和十二年(一九三七) 44歳  
 3月/『帝國主義下の印度』 8月/『国家の理想』(中央公論九月号)、山陰・山陽・四国講演旅行 10月/『神の国』(講演) 12月/願により東京帝国大学教授を免ぜられる。雑誌『通信』廃刊  
 昭和十三年(一九三八) 45歳  
 1月/個人雑誌『嘉信』創刊。  
 昭和十五年(一九四〇) 47歳  
 5月/『余の尊敬する人物』 6月/『イエス伝』  
 8月/朝鮮京城でロマ書講義  
 昭和十六年(一九四一) 48歳  
 11月/『山上垂訓講義』  
 昭和十七年(一九四二) 49歳  
 1月/『京詣歌集』 7月/約一カ月、滿洲北支視察旅行。12月/雑誌『嘉信』用紙割当停止処分  
 昭和十八年(一九四三) 50歳  
 1月/雑誌『嘉信』一月号発売禁止処分  
 3月/『訣別遺訓講義』  
 10月/『アウグスティヌス』告白『講義』  
 昭和十九年(一九四四) 51歳  
 6月/警視庁、雑誌『嘉信』の自発的廃刊勧告。  
 警視総監へ意見書提出。  
 12月/雑誌『嘉信』終刊。  
 昭和二十年(一九四五) 52歳  
 1月/雑誌『嘉信』会報一号発行。9月/雑誌『嘉信』復刊。11月/東京大学教授に復する。  
 昭和二十一年(一九四六) 53歳  
 6月/『日本精神と平和国家』  
 8月/東京大学社会科学研究所所長兼任。  
 昭和二十二年(一九四七) 54歳  
 4月/『日本の傷を医す者』  
 12月/経済学博士の学位を授与される。  
 昭和二十三年(一九四八) 55歳  
 4月/『帝國主義研究』 7月/『内村鑑三と新渡戸稲造』 8月/『聖書の平和思想とリンコーン』(共著)  
 10月/東京大学経済学部長に就任。  
 昭和二十四年(一九四九) 56歳  
 2月/『ロマ書』『キリストの生涯』  
 4月/『黙示録』  
 5月/東京大学教養学部長に就任。  
 6月/『創世記』  
 10月/日本学士院会員に就任。  
 11月/『続余の尊敬する人物』  
 昭和二十五年(一九五〇) 57歳  
 3月/『講と問題と平和問題』  
 12月/『ヨハネ伝』  
 昭和二十六年(一九五一) 58歳  
 12月/東京大学総長に就任。  
 昭和二十七年(一九五二) 59歳  
 4月/『現代日本小史』(編著)  
 11月/『大学について』『キリスト教入門』  
 昭和二十八年(一九五三) 60歳  
 4月/『日本のゆくえ』 6月/『詩篇』  
 11月/『銀杏のおちば』  
 昭和三十年(一九五五) 62歳  
 12月/東京大学総長に再選さる。『国際経済論』(共著)  
 昭和三十一年(一九五六) 63歳  
 1月/『サムエル書』  
 昭和三十二年(一九五七) 64歳  
 12月/『主張と随想』  
 12月/任期満了により東京大学総長を退任。  
 昭和三十三年(一九五八) 65歳  
 2月/東京大学名誉教授。3月/『私の歩んできた道』 7月/学生問題研究所所長に就任。  
 9月/『戦後日本小史』(編著)  
 昭和三十四年(一九五九) 66歳  
 11月/『ルカ伝』上 12月/『ルカ伝』下  
 昭和三十五年(一九六〇) 67歳  
 8月/『政治と人間』 10月/『人生と自然』  
 昭和三十六年(一九六一) 68歳  
 10月/『教育と人間』  
 12月25日13時40分/胃癌のため死去。正三位勲一等に叙し、瑞宝章を授けられる。

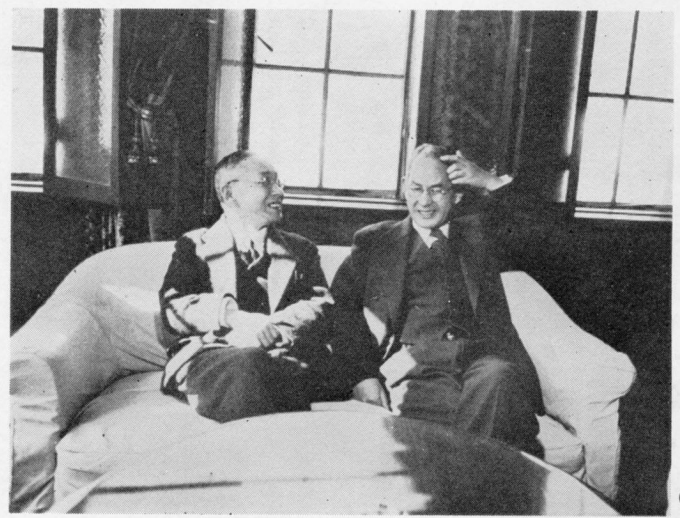
Nations.  
 "Political Economy."  
 Stewart work (Schopenhauer, P. IX.  
 W. G. N. R. 375.  
 Notes - collection of similar  
 society. R. 3.

Wealth  
 (2) annual  
 1. Capital wealth (accumulation) ...  
 2. Income wealth ...  
 Production of wealth ...  
 Exchange value (money value) ...  
 Necessary & conveniences of life ...  
 Wealth = well + th (originally a state or condition)  
 Mercantilism (Supposed identification with gold and silver)  
 foreign trade ...  
 Money - as the commensurable ...  
 Private riches ...  
 Public national wealth = abundance ...



B

A



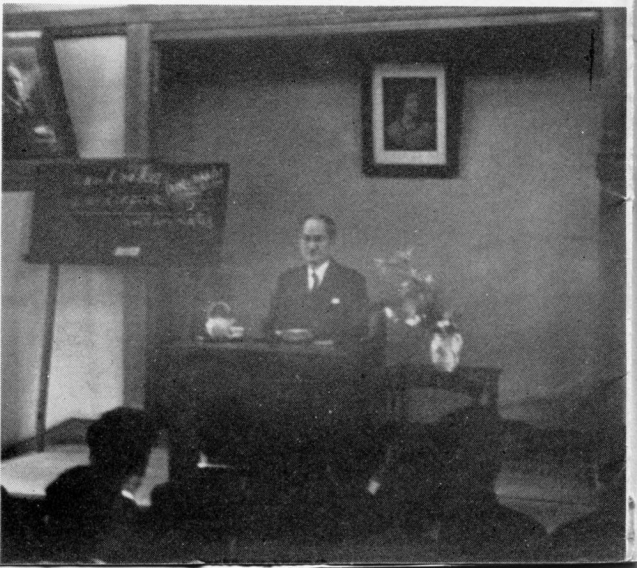
A 1937年12月, 東大を去る日の先生  
 B 東大講議草案 アダム・スミス「諸国民の富」について  
 C 大内兵衛氏と歓談する先生  
 D ネルー首相とともに (1957年)  
 E 今井館聖書講議 (1956年)  
 F 妙高聖書講習会にて (1959年)

D

C

F

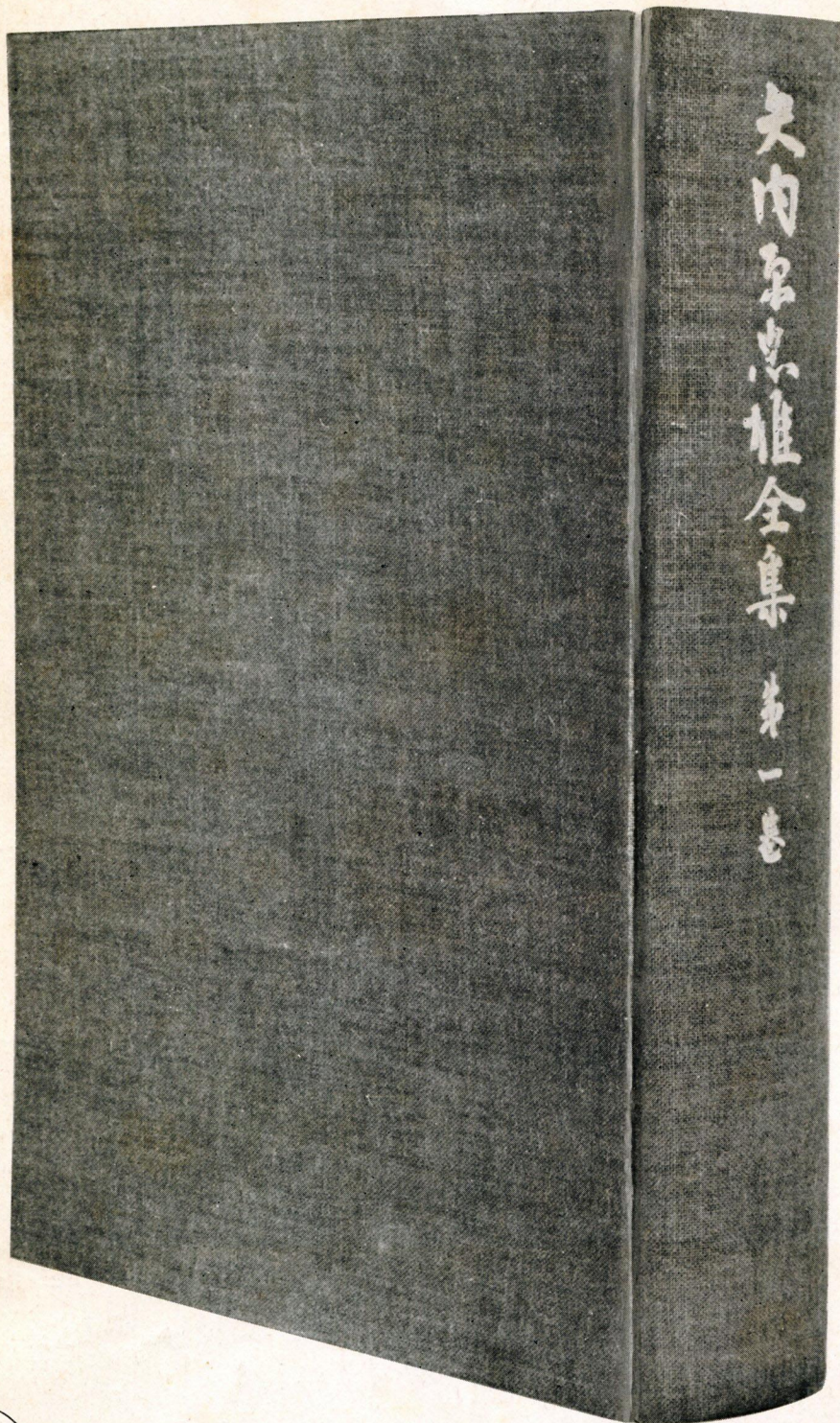
E



# \* 予約募集

申込締切  
4月30日

予約者のみお願いたします。  
申込期限までに最寄書店へお  
申込み下さい。詳細15頁参照



● 第一回配本 / 3月11日

● 第一巻 / 植民政策研究 I

植民及植民政策、植民政策の新基調

八〇〇円

● 第二回配本 / 4月11日

● 第六巻 / 聖書講義 I

イエス伝、山上垂訓講義、マタイ伝随想、使徒行伝

八〇〇円

